



かわかみ・たかし 1955年、熊本県本県生まれ。拓殖大学外事研究  
所所長。大阪大学博士。国際公共政  
策。ブレッチャールスクール外交政策  
研究所研究員。世界平和研究所研究  
員。防衛庁防衛研究所主任研究員。北  
陸大学法学部教授などを経て現職。  
著書に『新しい戦争』とは何か(ミ  
ネルヴァ書房)、『トランプ後の世界  
秩序』(東洋経済新報社)など。



1カ月を切ったドナルド・

トランプ米大統領と、北朝鮮

の金正恩(キム・ジョンウ

ン)朝鮮労働党委員長の米朝

首脳会談(6月12日)に向

け、両国間で熾烈(しれつ)

な駆け引きが行われている。

北朝鮮は先週、ジョン・ボ

ルトン米大統領補佐官(国家

安全保障問題担当)が提唱す

る大量破壊兵器廃棄の「リビ

ア方式」(一

短期間で大量

破壊兵器を国

外搬出し、完全廃棄後に経済

制裁を緩和する)に猛反発

し、会談破棄かと思われた。

ところが、トランプ氏は17

日(米国時間)、「われわれ

が北朝鮮について考えるとき

「リビア方式」はモデルとは

しない」と語った。米朝の心

理戦、裏交渉のジェットコー

スター状況が続く。

米国は、北朝鮮に対し「完

全かつ検証可能で不可逆的な

非核化」(CVID)をギリ

ギリまで降ろさないだろう。

最後は、次の5つの方法のい

ずれかが「落とし所」となる

のではないか。

# 米朝首脳会談 非核化へ5つの落とし所

で核兵器を撤去する「ウク

ライナ方式」。

第4は、軍事攻撃により核

兵器を除去する「イラク方

式」。

第5が、ボルトン氏が言及

した「リビア方式」である。

リビアの独裁者、カダフィ

大佐は後に反体制派に殺害さ

れている。北朝鮮が体制保証

の力ギである「核兵器」を、

とするならば、米朝首脳会

談までに「落とし所」は見つ

かるのか。それが最大の焦点

となる。

しかし、決めるのはトラン

プ氏である。正恩氏と会談し

て「台意・和解」すれば、朝

鮮半島で大変動が起きる。そ

れは休戦状態の朝鮮戦争が事

実上終焉し、「在韓米軍の撤

収」にまでつ

ながる可能性

もある。日本

にとつても、戦後最大の出来

事となるだろう。

逆に「決裂」であれば、そ

れはそのまま米国の「最後通

告」となり、北朝鮮への軍事

攻撃へとなりかねない。その

場合、日本も北朝鮮からの核

ミサイルの攻撃にさらされる

危険がある。

両者いずれの場合でも、日

本に対する影響は計り知れな

い。日本は米国にCVIDを

託すしかなく、事態の推移を

見守るしかない。来たるべき

事態に対する「覚悟」が必要

第1は、段階的な核開発能

力の削減と、経済制裁の緩和

をパートナーで進める「イラン

方式」だ。

第2は、経済制裁の強化と

国際社会からの孤立を進め、

自発的に完全廃棄

させる「南アフリ

カ方式」。

第3は、関係国

からの体制保証を

取り付け、バータ

方式」。

米朝関係の鍵を握

るボルトン氏(ロ



イター)

廃などの「修正」を迫ってい